

ずいそう

書の思い出

島原利昭



私は今年の2月に満63歳の誕生日を迎えた。父が亡くなった年令に達し、何がしかの緊張感と安堵感を憶えた日でもあった。以後、彼岸の国へ渡る準備、言い換えれば此岸（娑婆）での身辺整理をそろそろしなければと何気無しにはあるが考えて来た。何を子供達に残すかの篩い分けは中々難しい作業でその割りに、毎日の生活に追われているだろう子供達にとっては親の遺品を取捨選択する時間など有ろう筈が無く、私と女房がこの世を去れば古家は解体され、写真も書籍も家具類もガラガラポイと廃棄されてしまうだろう。だから子供達が気兼ね無く捨てることができるよう、親は下手に身辺整理などやらぬ方が得策で、片付けるといふ気苦労からも解放されるというものである。

そんな事を考えつつも、多少なりの身辺整理をしていた折、書道に関する書籍や道具が意外に多く有ることに気がついた。書というものに夢中になった記憶は無いが、常に関心が有った事は確かのようなのである。以下、書を通しての思い出を綴りたいと思う。

昭和20年代後半の小学校3年の頃、どう考えても生活にゆとりが有ったとは考えられない時代に、どういふいきさつかは判らないが2年間程書道塾へ通った。薄暗く、寒い部屋であったが同年代の子供で賑やかだった。週2回程の「習字」の勉強のお蔭かどうかは疑問だが、その後の文化祭で何らかの賞を数回は頂いたと記憶している。

昭和43年に新潟県に採用され、出先土木事務所に配属された。世は高度経済成長時代を迎えて公共事業



写真一 鉄舟高歩書

も大いに活気づいていた。信濃川大河津分水路が海へ注ぎ込む町であり、今では鮮魚のアメヤ横丁（主に関東地方の観光客が萬円札を切ってポリ箱一杯の魚介類を仕入れて帰る寺泊町の中心地）の端れにある「初君橋」という小さな橋の架換工事を監督した。その橋名版に私の字が残っているかも知れないという凶々しくも淡い期待を抱いて現地を訪ねた。その字は実に優しく品が有り、一目で私の書いたもので無いことが判った。

昭和57年から3年間、県庁砂防課地すべり係に在籍したが、その間にも大きな地すべり災害が頻発した。当時、県議会では地すべり対策特別委員会が設置されており、災害の報告や地すべり地域の安全を確保する為にはどうしたら良いか等の議論がされていた。災害の説明のために、大洋紙を3m四方の大きさにつなぎ合わせ、被災状況やその対策等手描きで製作していた。この資料を見栄え良く仕上げるには、タイトルを大きく、しっかりした文字で書く必要があった。そんな時には毛筆が最適で、紙と墨と筆があれば即刻出来る。私に任せて頂いてさらさらとしたためた（実際は失敗すればダメージも大きく、緊張して書いた筈である）。

15年程前、ある美術商から山岡鉄舟の掛軸を買った（写真一）。堂々として力強く、しかも大河の水面を流れるが如く一気に書き上げた書で、殺風景な土木事務所々長室が引締った。本物かどうかは判らないが、後日その美術商が買い戻しに来た事を想うと本物のだろう。どちらにしても一生楽しめるのだから安い買物であった。

冒頭、亡父の年令を超えたことを書いた。父の死後も義父母や92歳まで長生きした母も逝き、友人、知人の訃報を聞く事も多くなった。これ等先人達の供養にと春から写経を始めている。物豊かにして心亡ぶ現代社会において、写経によっていつでも、好きなだけ心静かな時間を得る事ができそうである。写経を通して仏の心を書き写し、故人の供養をさせて頂きながら、「書の世界」の一隅なりとも覗くことができたなら幸いである。